

山口誓子関連執筆、単行本・雑誌目録一覧（青木亮人）		
論題	出版社・発表誌名	発表年月
—単行本収録—		
『スポーツする文学』所収「スケートリンクの沃度丁幾」	青土社	2009. 6
『コレクション都市モダニズム詩誌22 俳句・ハイクと詩2』解説	ゆまに書房	2012. 10.
『京都近代文学事典』項目「山口誓子」	和泉書院	2013. 5
『その眼、俳人につき』所収 「十本の指、漂う手袋」・「戦時中の誓子、鐵色の蠅」・「回想の手袋」	邑書林	2013. 9
『NHKカルチャーラジオ 俳句の変革者たち 正岡子規から俳句甲子園まで』	NHK出版	2017. 3
『近代俳句の諸相』所収、第四部「山口誓子」計4章分	創風社出版	2018. 8
『新興俳句アンソロジー』所収「山口誓子」	ふらんす堂	2018. 12
⑤『愛媛 文学の面影 東予編』所収、第15、16、19、23、24章等	創風社出版	2022. 8
『教養としての俳句』所収、第4章「「一点の慰安」を求める」	NHK出版	2022. 10.
『対話形式で語る近代俳人入門』所収、「山口誓子」「新興俳句」各章	マルコボ. コム	2023. 8
—単行本未収録・雑誌掲載—		
新興スケートリンク 『京大俳句』の誓子憧憬について	同志社国文学	2009. 3
海への木枯、一九四四	円虹	2011. 2
④新居浜と山口誓子	愛媛新聞	2013. 7. 15
われありと思ふ鴉啼き過ぐるたび 山口誓子	ラジオ深夜便	2013. 10.
俳句という有季定型詩の読み方 山口誓子の場合	日本近代文学	2014. 11
稀少獣の息吹 山口誓子「七曜」について	俳句四季	2015. 4
誓子の「自尊」とユーモア	ぽち袋	2015. 1
俳句時評 『安井浩司俳句評林全集』 巨人の文業	現代詩手帖	2015. 6

—単行本未収録・雑誌掲載(続き)—		
論題	発表誌名	発表年月
山口誓子「汽罐車」連作と新興俳句	俳文学研究66号	2016. 1
③俳句時評5 山口誓子記念館	俳句	2016. 5
俳句と、周りの景色13 日本語の倍音	白茅	2016. 7
①「汽罐車」のシンフォニー 山口誓子の連作俳句について	昭和文学研究73号	2016. 9
山口誓子「黄旗」の凄みとその影響	ぼち袋	2017. 1
山口誓子と新興俳句について	ぼち袋	2017. 3
「天狼」創刊と、焚火のひとひら	ぼち袋	2017. 5
光と陰 山口誓子	山茶花	2019. 1
俳句時評 平成の終わりに	朝日新聞	2019. 4. 28
⑥いつでもそこに、俳句があった 郷愁の昭和俳句32カツレツ、とんかつ	俳壇	2020. 8
詩歌散策 「寒けれど吾が乗る人車凭れあり」	文化愛媛	2021. 1
⑦逸話のさざめき、句の面影16山口誓子	俳句界	2021. 4
身分と「人間」の狭間で 120年前に生まれた四俳人	俳句界	2021. 9
⑧「タイムトラベル 俳句の歴史」昭和戦前・戦後期の各回	NHK俳句	2022-2023
「現代俳句史」3-4	100年俳句計画	2023. 11-12
②「品川鈴子と「ぐろっけ」1-26	俳句四季	2023-連載中
小林秀雄の眼と俳句08 自分と出会う読書	俳句	2024. 8
小林秀雄の眼と俳句10 見と観	俳句	2025. 1

「汽罐車」のシンフォニー

——山口誓子の俳句連作について——

青 木 亮 人

はじめに

昭和初期の大阪駅には夥しい数の省線（国鉄）列車が出入りし、特に冬の朝に霧がかかると構内は先が見えなかったという。「この霧は、列車から吐き出す煤煙と連つて、十間先きが分くらぬほどの濃厚さである。駅構内にはみな電燈がつく。黒ずんだ駅上の時計塔が、ときどき霧の動きで亡霊のやうに隠見する」（北尾鐙之助『近代大阪』創元社、S7）。冬の構内に射しこむ弱い日ざしもいつしか柔らかな春光になり、梅雨を過ぎて夏の照りつける陽光が降り注ぐ頃、ある俳人が次のように詠んだ。

大阪駅構内

山口 誓子

夏草に汽罐車の車輪来て止る

汽罐車の煙鋭き夏は来ぬ

汽罐車の眞がねや天も地も旱

汽罐車の車輪からくど地の旱

夏の川汽車の車輪の下に鳴る

〔かつらぎ〕S8・9、後に句集『黄旗』収録

うだるように暑い駅構内に漆黒の鉄塊が喧しい音や蒸気をまき散らしつつ停止し、かつ駅を去りゆく情景——省線が高架に切り換える前の話で、当時は地上を走っていた——を詠んだ句群で、作者は山口誓子、大正後期より「ホトトギス」（高浜虚子主宰）で頭角を現した俳人である。彼は虚子の下で「写生」に励みつつ、「ホトトギス」の主流たる「花鳥諷詠」——四季折々の自然を「写生」した句——を踏み越えるように「都会風景の中から近代的な素材を掘り起こした」（山本健吉『現代俳句』角川書店、S26）俳人とされ、「現代俳句が誓子に始まる」（『日本名句集成』〔學燈社、H3〕、誓子項）と称えられた。

「汽罐車」句群は、発表時から映画を想わせる雰囲気があったらしい。ある俳人は一句目を次のように評している。「画面一杯に映し出された車輪が、ゆるやかにまはりあらはれてとまった。そういふ映画を憶ひ出す」（長谷川素逝「大阪駅構内」の句に就いて）、『京大俳句』S8・10……当時、誓子はエッセンシュテイン（ソ連の監督）等のモニタージュ論を援用した俳句論でも知られ、そのためか、発表当初から右のような評が語



句の手触り、俳人の響き



—現代俳人スケッチ—
Vol.54 品川鈴子と「ぐろっけ」7

青木亮人
Makoto Aoki



山口誓子は「夏草に汽罐車の車輪来て止る」といった句を詠み、「二物衝撃」「根源俳句」等の俳句観が看板になったため、抒情を排した非情な作家というイメージが強い。東京帝国大学法学部から住友本社に就職し、「ホトトギス」の四Sとして仰がれたという経歴もそうした印象をさらに強めているよう。

一字も揺るがせにしない緊密な措辞で刻まれた誓子句のように、彼自身も何事につけ正確だった。例えば、人との待ち合わせやカルチャー教室等で誓子は必ず早めに現地に到着し（相当早かったという）、近くで時間を潰した後に姿を現したものだ。当然ながら約束事も守り、礼状その他もきちんとしていた。

木村美猫氏によると、品川鈴子氏はこうした誓子のありようを世間的なイメージと別のところで理解していたという。彼が時間その他をきちんと守ろうとしたのは、幼少時から人の世話になり続けて育ち、他人様に迷惑をかけてはいけないという性格が身についたためではないか、というのだ。

誓子は二歳の頃に両親の諸事情が重なって外祖父の脇田嘉一に引き取られ、親と離れて育っている。脇田は京都で政友会幹部として政治活動に勤しんでおり、家には多くの書生が出入りし、芸者衆が遊びに訪れることもあったという。しかし、後に誓子が京都の第三高等学校に入学した頃、外祖父の経済状況

は逼迫——政治活動や新聞事業等で財産を傾けたという——しており、それゆえ脇田はかつて目をかけた佐々木惣一に誓子の世話をお願いした。佐々木は京都帝大の法科大学教授であり、彼は脇田の依頼を受けて誓子を一時自宅に住ませ、学資等の面倒を見ている。

若き誓子は脇田や佐々木の意向で法学の道を歩み、二人の期待に応えねばと勉学に励んで東京帝大の法学部に進学した。誓子は両親との縁は薄幸——父の生業や私生活は不安定で、母は自殺している——だったが、外祖父の脇田や佐々木惣一のおかげで帝大まで進学しえたのであり、かような環境を与えてくれた庇護者の恩義に報いようと誓子は幼少時から自らを律し、周囲に迷惑をかけず、期待に背かない努力を厭わないような心がけた節がある。

誓子は大学卒業後も複数の庇護者に恵まれる幸運を得た。彼は佐々木惣一の勧めで住友本社に入社後、そこで常務理事の川田順（歌人）の厚遇を得たために——川田は若き誓子を不世出の俳人と絶賛した——、誓子は社内で将来の幹部候補と遇され、社外では俳句活動に存分に勤しむことができた。加えて、関西の句会で席をとにした浅井啼魚——大阪商船の海外支店長にして大阪海上火災の創設者——にも見込まれ、誓子は啼魚の息女である波津女と結婚している。そのた



句の手触り、俳人の響き



—現代俳人スケッチ—
Vol.60 品川鈴子と「ぐろっけ」13

青木亮人
Makoto Aoki



鈴子氏が晩年の山口誓子を支えようと思ひ決めた理由の一つには、誓子の母への恋慕に心を揺さぶられた点があるのかもしれない。誓子は十歳の頃に母を亡くし、家族の縁が薄かったため（本連載第七回参照）、肉親や妹たちへの想いは人一倍強かった。例えば、「七曜」（橋本多佳子主宰）の大会で「天狼」や誓子一行が淡路に赴いた際、鈴子氏は誓子の隣席で浄瑠璃の「傾城阿波鳴門」巡礼歌の段を観る機会があった。家老の宝刀が盗まれ、家来だった十郎兵衛と妻が盗人仲間に加わり、質屋の蔵等に忍び入って探索するという物語で、十郎兵衛が任務を帯びて盗賊に身をやつす際、娘を祖母に預けるのだが、娘は父母を探すために巡礼の旅に出る。ある時、娘は母と偶然巡り合わせるが、眼前の女性が母とは知らずにあどけない様子で自身や両親の名を告げる場面にさしかかると、鈴子氏は隣席の誓子が眼鏡を押し上げ、嗚咽を殺して涙を拭っていることに気付いた。客席は暗かったために鈴子氏は気付かないふりをして舞台を見続け、やがて場内が明るくなると誓子は毅然とした様子に戻っていたという。

鈴子氏の母は誓子の場合と異なり、天寿を全うしたが、鈴子氏は十代の頃に母への想いを募らせた時期があった。それは愛媛の女学校を経て神戸女子薬専の寮に入り、孤独な学校生活を送った時である。知り合いもいない

上に同級生の多くが年上であり（本連載第一回）、鈴子氏の孤独感は嫌が上にも募った。寮で独り過ごす時には母が御守り代わりに持たせてくれた鈴を振っては寂しさを紛らわせ、郷里や母を思い出してよく泣いていたという。かような体験を十代の頃に味わった鈴子氏にとって、生まれてまもなく両親や妹たちと別れて育ち、十歳で母を亡くした薄幸の誓子がどれほど母を希ったか、その胸中を察して余りあるものがあつたのではないか。

鈴子氏にとって母が大切な存在だったのは、鈴子氏が品川猛氏と結婚する際、複雑な事情を飲みこんだ上で後押ししてくれたことも大きかった。神戸女子薬専を卒業後、住友化学に勤めた鈴子氏は薬剤関係の仕事に就いたこともあり、若き医者との見合いをする。相手の男性は慣習に縛られない発想の持ち主で、結婚前提の交際は互いに気が張るため、気軽な友達関係から始めませんかと提案したという。鈴子氏もそれならば気安いと賛同し、他の友人たちも交際を始めた。その男性の親友が同業の医者である品川猛氏であり、当初の品川氏は鈴子氏をあくまで友人の交際相手として接していたのである。

そうして皆で友達付き合いをしていた頃、品川氏が突如倒れて入院する出来事が起こった。それも悪性の腫瘍らしく、長く持たないかもしれないという。品川氏は芦屋でも知ら

山口誓子記念館

青木亮人

Aoki Makoto

◆神戸大学へ

阪急神戸線の六甲駅を降り、やや急勾配の坂道を十分ほど歩くと神戸大学のキャンパスに至ります。キャンパス内の文学部棟や食堂を通り過ぎつつ留学生センターにたどり着くと、初めて訪れた方はそこからの眺めに息を吞むでしょう。眼下には神戸の街並みや海が広がり、晴れた日には海面に陽光がきらめくのが見え、吹き抜ける風も心地良い。もちろん、この眺望自体が目的ではないのですが、素晴らしい眺めなので何度訪れても佇んでしまいます。

留学生センターには何があるかというと、ご存知の方も多いと思いますが、すぐそばに山口誓子関連の記念館と文庫があるのです。

◆誓子宅の雰囲気

山口誓子は生前に自身の蔵書や句帖、遺稿、また遺品に加え数多くの俳諧、俳句資料、かつ居宅や財産等も併せて神戸大学に寄付しました。その蔵書や資料等は「誓子・波津女俳句俳諧文庫」（以下「文庫」と略）となり、また居宅は阪神・淡路大震災で倒壊したため現在の留学生センターそばに復元され——海外留学生や客人等の日本文化体験の場として利用できるように——、「山口誓子記念館」（以下「記念館」として現在に至ります）。

誓子は〈夏草に汽罐車の車輪来て止る〉（昭和八年）等のように近代都会の情景を即物的に詠んだ作風が著名で、また大阪中之島の住友本社に勤めたということもあり、「俳人誓子Ⅱ西洋風都会人」というイメージがあります。実際の住居は抑制の利いた気品——違う言葉でいえば「粹」な——漂う数寄屋造りで、それは震災後に復元された居宅からもうかがえます。実際

四季録

産業と芸術は関係が深い。19世紀に画家は汽車の煙を描き、20世紀には写真家が石炭荷役機を撮った。建築家や文学者も産業に芸術性を見いだすなど、機械文明と近代芸術は密接な間柄にあり、それは俳句も同様である。

近代産業の美を謳った俳人といえば、昭和期の山口誓子であろう。若くして天才と呼ばれた彼は飛行機や起重機、機関車等を詠み、従来の俳句が苦手とした機械美を謳う俳人として畏敬された。たとえば、九州の八幡製鉄所を詠んだ「七月の青嶺まぢかく熔鑪」は、俳句史上の傑作と名高い。その誓子は新居浜の別子鉱山に幾度か訪れている。

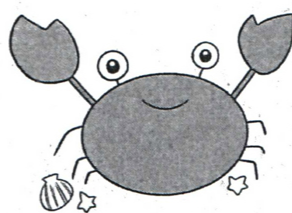
彼は住友に勤めており、仕事関連で銅山に赴いたのだ。有名なのは1957(昭和32)年に訪れた際、「大露頭緒くてそこは雪積まらず」と詠み(「大露頭」は鉱床が地表に露出し、酸化したもの)、東平修理工場前に句碑が建立されたことだ。

新居浜と山口誓子

う(現在は港付近に移設)。

誓子は37(同12)年にも銅山を訪れており、その様子を次のように記している。「東平の事業場へ行く日のことであつたが、端出(はでで)場といふ鉱山鉄道の終点で降り、そこで坑内電車に乗り換へた。(略)電車は動き出すと直ぐ隧道に入つた

が、私達の人車は板の椅子だつたので強い震動が絶えず頭にひびいたし、荒削りの岩の天井から水の滴が私達の夏帽にしたり落ちた。隧道の内部はとびとびに燈が点いてゐて、それが



真直ぐに世界の果まで達してゐるやうな感じがした」

(「海の庭」、42年)。

新居浜駅から端出場に向かい、坑内鉄道に乗り換えて東平まで上り、その日は山中の接待館(推定)に泊まったらしい。「私達の部

屋の前には谿を隔て、夏山が青く塞がつてゐたが、夜になると下の東平の村に燈が点いて大きな螢籠のやうに見えた」(「春夏秋冬」、54年)。誓子が訪れたのは37(同12)年7月、東平にはまだ1500人強の人々が住んでいたのだ。

先日、鉱山鉄道として栄えた旧星越駅に立ち寄った。小さな木造駅舎で、すぐ後ろに大きな選鉱場が控えている。戦前の誓子が「螢籠」に見えたという夜の東平に住む人々も、日中は星越駅を利用することもあつたろう。駅舎はかつての賑わいを漂わせつつ、西日を浴びてたたずんでいた。

(青木 亮人・愛媛大教育学部准教授)

家ノ島の工場群、廃校に残された黒板の歌詞

——山口誓子、藤井未萌、片平恵美など

製鍊島霞む大きな島なるらし

山口 誓子

近寄るまで大きな製鍊島霞む

同

〔俳句〕昭和三十七年発表、「山陽・山陰」より。以下同）

近代最高峰の俳人の一人、山口誓子は昭和三十六（一九六一）年四月に四阪島を訪れており、その時の印象を約二十句にまとめて発表した（約一年後に最大の総合誌「俳句」に二挙掲載）。四阪島は別子銅山を経営する住友家が購入した島であり、瀬戸内海に浮かぶ四島の総称である。誓子句はその中でも島全体を製鍊所にした「製鍊島」へ船で近づきつつある様子を詠んだものだ。

誓子が訪れたのは春だったためか、船上から島の方を眺めると霞が濃く立ちこめており、そのぼんやり霞む姿へ近付くにつれ、想像以上に「大きな島」である迫力を感じたようだ。約二キロの島が丸ごと製鍊所の工場で覆い尽くされ、六十五メートルもの大煙突が屹立する島であり、誓子は巨大な軍

いつでもそこに、俳句があった

郷愁の昭和俳句



③② カツレツ、とんかつ

青木亮人

明治三十四（一九〇一）年生まれの山口誓子は京都の祖父に育てられ、幼少時に洋食を折々食したという。祖父は政治運動に携わる名士で、いわゆるハイカラな嗜好があり、折に触れて西洋料理店から料理を取り寄せることがあった。誓子はその時のことを次のように回想している。

出前の持つて来た箱の中には、洋食の皿が、円い木の枠を間に挟んで積み重ねてあった。私を最も喜ばしたのは、カツレツである。ソースをかけたカツレツの衣は、パン粉を揚げた香ばしさに、酸っぱさとぴりつとした辛さとが混りあひ、得も云はれぬ味であった。このやうなおいしいものが世にあるのかと驚かれるくらゐであった。（「洋食」、昭和二十六年）

明治後期の話であり、少年の誓子は「カツレツ」に胸を躍らせたという。現在のとんかつに近いが微妙に異なる料

理で、昭和戦後に大人の誓子が懐かしんだ往時のカツレツはいわゆるとんかつよりも薄く、衣やソースも異なる洋食だった。

カツレツは明治期渡来の西洋料理の一つで、フランス料理のコートレット（英語でカットレット）に由来する。西洋のコートレットは牛や羊の骨付肉に卵黄やパン粉等をまぶして焼く肉料理を指し、同種料理にヴィーナーシュニッツェル（ウィーン風カツレツ）等もあった。薄い牛肉の切身に小麦粉や卵黄、パン粉を付けて焼く調理法で、日本のカツレツに近い。これらが明治期に文明開化の響きとともに西洋料理店で供され、肉料理に馴染みの薄い日本人も親しむようになった。

ゆえに山口誓子が幼少時に感嘆したカツレツは日本風に改良された洋食で、東京銀座の煉瓦亭の創案とされる。コートレットのようにフライパンで炒め焼くのではなく、

近現代俳人の肖像

逸話のさざめき、句の面影

第十六回

山口誓子

青木亮人

(近現代俳句研究・愛媛大学准教授)

山口誓子の句集といえ、第一句集『凍港』

(昭和七年)や第二句集『黄旗』(同十年)が著

名かもしれない。(七月の青嶺まぢかく熔鉾

爐)『凍港』(夏草に汽罐車の車輪来て止る)

(『黄旗』等、現代俳句の幕開けとされる斬新

な句群が収録されているためだ。しかし、彼

のまなざしが濃く滲み出るのは、第三句集以

降のように感じられてならない。

蜥蜴照り肺ひこひことひかり吸ふ

ゆきとまる蜥蜴に林泉^{しみ}は息をこらす

するすると岩をすすると地を蜥蜴

(第三句集『炎昼』、昭和十三年)

樹を攀づる蜥蜴顎より黄なりけり

(第四句集『七曜』、昭和十七年)

蜥蜴のありようを愛でるように仔細に観察

し、その奇妙な生態に昂揚感すら抱きながら

蜥蜴の動きそのものを活写した句群。夏の照

りつける陽光の下、蜥蜴が無表情のまま呼吸

を続ける胴部の煌めきや、顎から下が黄色で

あることは無内容に近い些事であろう。それ

を誓子は魅入られるように見つめ、「するす

ると」動く蜥蜴を情熱とともに追うのだ。

そのまなざしは、次のような世界を現出さ

せることもあった。

蟋蟀^{はあり}が深き地中を覗き込む

飛蟻あまた水辺に死す此の一事 (『七曜』)

1945年、終戦

一九四六年、樺太から復員した兵士たち。
(写真提供…朝日新聞社)

外にも出よ触るるばかりに春の月

中村汀女

外に出ると春月が潤むように輝き、触れられそうに大きい。家の人に「外にでも出ていらつしやい、見事な月が出ていますよ」と呼びかけた。昭和二十一年作。

山野を吹きさす木枯が海に出るや、帰る場所もなく彼方まで吹きつもの……虚無感と微妙なおかしみ。哲三が戦争末期に詠み続けた未発表句群の一句。
遠星(同二十二年)収録。

海に出て木枯帰るところなし

山口誓子

※作は作句年、「刊」は句集刊行年となります。

1947年刊

1946年作

日本文化は敗戦の要因と批判され、俳句や短歌は旧弊と痛罵されます。第二芸術論にはこうした背景がありました。



- 1945 8月、東久邇宮稔彦王内閣、
「一億総懺悔」を説く
- 1945 10月、自由制限の撤廃
(政治・思想犯釈放、特高警察廃止等)
- 1945 12月、婦人参政権の実現

敗戦と解放感、
そして第二芸術論の衝撃

昭和二十年、日本は敗戦を迎え、庶民は空襲と本土決戦の恐怖から解放されました。同時に、人々は住居不足や食糧難といった混乱の埒に投げ出されます。出征した親兄弟や子の安否は不明のまま、警察を気にしながら違法の買い出しで満員列車に乗り、駅では戦争孤児が寝泊まりする……虚脱じみた解放感や混乱とともに戦後生活が始まったのです。

日本を統治下に置いたGHQは改革に着手し、財閥解体や農地改革に加え、女性参政権を認めました。中村汀女の句は、戦後に活躍する女性の明るさや戦争終結の解放感を図らずも象徴した作品といえるでしょう。

GHQは治安維持法も撤廃し、アメリカ批判以外は言論の自由が認められました。終戦の解放感も相まって膨大な俳誌が創刊され、また戦時中に圧迫された新興俳句や人間探求派の俳人たちが活動を再開します。そうした中、二十一年、仏文学者の桑原武夫が封建社会以来の俳句文芸など第二芸術に過ぎぬと否定しました。俳人たちは一斉に反論し、この桑原論にいかに応えるかが戦後俳句の原動力となります。その象徴の一つが「天狼」創刊であり、戦前の新興俳句の主要俳人が山口誓子の下に集い、第二芸術論に抗するように旺盛に作品を発表し始めます。